第10回夏期福音特別集会（4）（御岳駒鳥荘）
殉教の天路
――使徒行伝第19～21章――

1963年8月25日
小池辰雄

御霊の道　第三次伝道の帰路　パウロの別れの言葉　担い上げ　武士道精神　パウロの霊の子
テモテ　受肉と霊体　謹みの霊　よき戦士としてあれ　軽騎兵の突貫　殉教の天路　善き戦闘
聖霊の維新　絶対の死か、絶対の生か

【使徒19】

……8ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて論じ、かつ勧めたり。9然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。10斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。12即ち人々かれの身よりあるいは手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。

【使徒20】

1騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧をなし、之に別を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。……
6我らは除酵祭の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著き、彼らの許に到りて七日のあいだ留れり。
7一週の首の日われらパンを擘かんとて集りしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半まで語り続けたり。8集りたる高楼には多くの燈火ありき。9ここにユテコという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶け起こしたるに、はや死にたり。10パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言う『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』11すなわち復のぼりてパンを擘き、食してのち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。12人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍を得たり。
13斯て我らは先立ちて船に乗り、アソスにてパウロを載せんとして彼処に船出せり。

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、
18その来りし時、かれらに言う『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、20益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、
21ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。22視よ、今われは心搦められて、エルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。24然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固より生命をも重んぜざるなり。25視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。26この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきて潔よし。27我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。28汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。29われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて群を惜まず、30又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。31されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを覚えよ。32われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。33我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。34この手は我が必要に供え、また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。
35我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』……

【使徒21】

……10我ら数日留まり居るうちに、アガボと云う預言者、ユダヤより下り、
11我らの許に来りてパウロの帯をとり、己が足と手とを縛りて言う『聖霊かく言い給う「エルサレムにて、ユダヤ人、この帯の主を斯の如く縛りて異邦人の手に付さん」と』12われら之を聞きて此の地の人々とともにパウロに、エルサレムに上らざらんことを勧む。13その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることも覚悟せり』14斯く我らの勧告を納れぬによりて『主

の御意の如くなれかし』と言いて止む。……

●御霊の道

パウロの第三次伝道の続きでありますが、19章です。

8ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて論じ、かつ勧めたり。9然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。10斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手により て尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。

余りにパウロが聖霊に満たされているものでありますので、

12即ち人々かれの身よりあるいは手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。

と、驚くべきことが書いてある。現象から見ると、まじわざみたいでありますけれども、いわゆる「まじわざ」とは違う。「おまじない」でも何でもない。キリストの衣に触れたら癒えたというのがありましたが、あれと同じ次元に入っているパウロであります。ところが、まじわざをやる奴がキリストの名を借りて悪いことをした。そうしたら、悪霊に反って逆にやっつけられたことがそこに書いてある。

「私は聖名によって、これこれの事を致しました」

と言っても、

「われ断えて汝らを知らず」（マタイ7・23）

という言葉がある。これはマタイ伝の7章の終りの方に書いてある。イエス・キリストの聖名を呼んでも、いろんな力ある業が、聖名を借りてもできる。それはまじわざ式な霊的な作用です。聖名が呼ばれていても、ある仕事をするかも知れない。けれども、

「私はたえて知らん」

という。どこまでも、問題は、ただそういった事柄の聖名の現象面でもなければ、業の現象面でもありません。問題はどこまでも、

「質的に本当にこの御霊に、主の御意に従っているか、これを身に体しているか」

と、この一点にかかってくるわけです。世の中にはいろんな宗教があります。どうか、どうのこうのと、決してそんなことに惑わされないように。私たちの道は本当にこの御霊の道であります。御意の道であります。その点で、何ともいえない揺るぎなき平安の中にあります。

それから、デメテリオという銀細工人のことが書いてある。アテナのアルテミスの女神を大いに奉っていたわけですが、パウロが来たものだから邪魔されて、どうも御利益の面

で邪魔になるからというわけで、大騒ぎしたことが書いてある。

●第三次伝道の帰路

20章です。

1 **騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧(すすめ)をなし、之に別(わかれ)を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。**

旅のことがずっと書いてある。パウロの第三次伝道の帰り路というのは、非常に舟路が多い。

6 **我らは除酵祭(じょこうさい)の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著(つ)き、彼らの許に到りて七日のあいだ留れり。**

7 **一週(ひとまわり)の首(はじめ)の日われらパンを擘(さ)かんとて集(あつま)りしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、**

明日は立つから、もう今日はお別れだから、少しゆっくり皆と懇親会をやろうと。パウロが中心になって語りながら――パウロばかりが語ったのではないらしいですが――しかし、パウロが中心であったことはもちろんで、

夜半(よなか)まで語り続けたり。8 集りたる高楼(たかどの)には多くの燈火(ともしび)ありき。9 ここにユテコという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々久(いよいよ)しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶(たす)け起こしたるに、はや死にたり。10 パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言う

身体をもって蔽うんです。これはエリヤ、エリシャがやりました。列王記略上の17章と、下の4章に書いてあります。霊的体温をもって温める。そして、霊の息吹を吹きかけてやる。そうすると、生き返る。今のような技術的な人工呼吸じゃない。

『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』11 すなわち復(また)のぼりてパンを擘(さ)き、食してのち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。12 人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍(なぐさめ)を得たり。

実にパウロという人は――キリストがその最たるものですが――自由自在であります。これは本当に聖書の世界の天的法則の自由です。パウロの別れに於ける、この日常の光景は何と心温まるところの一副の絵を見るが如きものです。パウロのそういうところは、非常に人間味のあつい人で、しばしば彼は心から、はらわたの涙を流した人であります。

13 **斯て我らは先立ちて船に乗り、アソスにてパウロを載せんとして彼処に船出せり。**

それから今度はキヨス、サモス、ミレトと、次から次へと、港から港へと旅をしていくわけです。そして、五旬節にエルサレムに着くようにと舟路を急いだ。

●パウロの別れの言葉

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、
18その来りし時、かれらに言う『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、20益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、
21ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。22視よ、今われは心搦められて、
「聖霊にからめられて、とらえられて」と言った方がいい。
エルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。24然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果さん為には固より生命をも重んぜざるなり。25視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。

キリストがガリラヤから首をエルサレムに向けて勇ましく進んで行かれた。ルカ伝の9章の50節あたりの所に書いてある。キリストが先頭に立って進まれた。パウロも、あのキリストの心と同じです。キリストが十字架に向かわれたように、彼は殉教の目的に向かっていく。彼は自分の死が、主に倣うものであることを既に聖霊で示されている。

26この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきて潔よし。
27我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。28汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。

「血をもて買われたる」ところのもの、血をもて贖われたるところのもの、このエクレシアであります。

29われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて群を惜まず、30又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。31されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを覚えよ。32われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。33我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。34この手は我が必要に供え、

「この手は我が必要に供へ」、聖霊によるところの手です。彼は幕屋を造って歩いていた。

また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。35我すべての事に於て

例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』

これがパウロの別れの言葉です。

●担い上げ

19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、

と。「謙遜の限りをつくし」とは、日本語の「謙遜」というのとは違う。これは本当の魂の砕けです。いわゆる、量ってみれば、パウロの方が正しくて大いに抗議すべきこともたくさんある。主張すべきこともたくさんある。けれども、彼はそれをみな自分に背負って、いかにもしてその人たちを救わんとの、その事が彼の「謙遜の限り」なんです、相手にキリストをもたらさんことが、相手を何とかしてこの救の世界に入れんことが。そのためには、どんなに呪われても、どんなに捨てられても、どんなに誤解されても、この自分は下手である。そして、下手であるということは、ただ卑下するのではない、相手を担い上げることであります。

この担い上げというのが、これがクリスチャンの本当の実存なんです。相手を、敵をかつぐ者、これが本当の勝利者で、敵を倒す者が決して勝利者ではない。敵を倒す者は必ず滅びます。敵を担い上げる者は本当に神の国を築いていく。敵を、相手を担い上げる、この担い上げの魂がパウロのこの「謙遜の限りを尽くして」という気合であります。

既に、パウロの回心の時に復活のキリストが示したもうた。9章に書いてあるとおり。

15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり』

「わが名を担い行くところの、運びゆくところの、我が選びの器である」と。

16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』」（使徒9・15～16）

「受けざるを得ざるかを」と、これも「受くべきかを」という「デイ」を使ってある。ヨハネ伝の一番終りの所を見ると、

「今に人に帯びせられて歩くことになる」

と、ペテロが殉教の死を遂げることを復活のキリストがペテロに示しておられる。

23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。

と、実に彼ら創業の人たちは――今のクリスチャンは実に安泰な道を大体歩いていますけれども――2、3世紀頃まで初代のクリスチャンたちの殉教は特にひどい。ことにローマの皇帝がひどい事をしましたから。創業時代の人たちは道を開拓する、開拓者たちですから、

なまやさしいところの道ではない。荊棘（けいきょく）のいばらの道であります。

●武士道精神

24**然ど我わが走るべき道程（みちのり）と主イエスより承（う）けし職（つとめ）、すなわち神の恵みの福音を証（あかし）する事とを果たさん為には固（もと）より生命をも重（おも）んぜざるなり。**

元来、日本人は、

「主君の為に生命を棄てる」

という武士道的精神というものが、第二次戦争がひっくり返るまで、ありました。まぁ、いろいろな面もありましょうけれども、しかし、天皇のためには水火も辞さないという軍人精神というものは、確かにそこにかかっていた。今の若い人にそんな事を言うと、天皇陛下のことを

「天ちゃん」

なんて言って、てんでおかしいというようなわけです。そういった、昔の私たちが感じていたような愛というようなものは、もぅ決してわからん。もちろん、天皇を拝むというようなことはおかしなことです。とにかく日本の伝統的な方（かた）に――それらの方の実在がどうであるこうであるは別問題です――日本の親として立てられているような方々に対する、ある種の尊敬の念を払うことはむしろ自然であります。

けれども、いろんな新しい観念からしてみれば、やりきれないものがもちろんあることは当然でしょうが、それはそれとしまして、善かれ悪しかれ、とにかくしかし、天皇に対するところの

「忠誠」

主君に対するところの「忠誠」ということ。赤穂義士の精神がそれです。そういった、忠誠の「忠」というこころは実は、福音の、キリストが持っていたこころである。主なる神に対する「忠」は、あるいは「孝」といってもいい。忠孝一如です。

「御意を成させたまえ」

「十字架の死にいたるまで従いたまえり」

とは、武士道精神の気合を言っているわけです。相手が神さまです。相手は絶対者で絶対意志を持っている方で、いわゆる「現人神（あらひとがみ）」というようなことではない。その点ではもちろんいわゆる「忠君愛国」には違った面がありますけれども、しかし、その気合というものには大事なものがある。

私は今でも楠木正成（くすのきまさしげ）というような人物のその気合には、やはり文句なしに敬意を表します。封建制度そのものは決して感心したことではない。上の人と下の人との間が、本当に、信と愛との関係において貫かれているということは、それは美わしい。そのことと、各人が本当に神の前に自由平等であるということは矛盾しない。神の前に自由平等であるとこ

ろの、人間の魂の尊厳というものは、これは侵すべからざるものです。そのことと次元が違う。次元が違うと言いますか、範疇が違うんです。

そういうスピリッツ、

「キリストのためには」

というのがパウロの正に武士道的精神である。だから、御利益教ではない。キリストが神の意志を持ち給うところの方である。だから、「主のためには」というのは、正に「神のためには」と全くピタリ一つであります。

「主のためには固より生命をも重んぜざるなり」

ということ。

「生命は鴻毛より軽しとする」

と私たち日本人は教わっている。「鴻毛」というのは非常に軽い鳥の毛です。しかしながら、主のためには、この生命は

「泰山より重い」

です。

「主のためには、この生命は泰山よりも重く、かつまた主のためには、この生命は鴻毛よりも軽い」

という、この矛盾した二つの命題がピタリ一つなんです。私たちの生命は決して軽々しく棄てるべき生命ではない。キリストも、ある時が来るまでは鮮やかにサタンの手から逃れておられる。キリストを捕らえようとしたって、捕らえることができない。神さまが

「よしっ」

と言う時に十字架にかかられたので、それ以外の時は、キリストはどんな相手が来たって、

「たちまちそこをスッと通りぬけた」

と書いてあるところがある。霊的な権威です。神さまの霊的な御霊の権威というものによって、彼は自由自在に動いておられた。

パウロもキリストの御意にしたがって自由自在に伝道していた。第一次、第二次、第三次伝道といきまして――やがて自分は判決が近づいてきた――第四次はいよいよローマに乗り込んでいくわけです。乗り込んで行くといったって、捕らわれの身となって乗り込んで行く。エルサレムで捕らわれてしまう。そのことは知っている。しかしながら、パウロは福音のためにはこの生命は決して軽くない、全世界よりも重い。泰山よりも全世界よりも重い。

「汝ら、この生命を失わば、全世界を得るとも何の益あらん」

と、キリストは私たち一人一人の存在を、全世界とも比較できないような重いものとして考えていてくださる。キリストほど、驚くべき重力を持ったものはない。と同時に、これはまた別な面からいうと、こんな重いものがまた何ものよりも軽い、ということであります。

最も重くして最も軽きものは何ぞや。それはクリスチャンの重さである。福音の使命のあるところは絶対に神さまは守ってくださる。また、その人が天にとられることがより大きな使命となれば、神さまは取り給う。

「私は生きるも死ぬるも唯だこれキリストである」

と、パウロは言った。

●パウロの霊の子テモテ

テモテ書というのを開きますと、テモテというのは、パウロの信仰の息子、パウロによって、信仰によって捕まえられた、生まれた子供であります。

「パウロのまな子」

と書いてある。本当の子という。本当の子というのは、御霊によって生まれた子で、正に「霊子」なんだ。テモテはパウロの霊子なんだ。霊の子である。

だから、皆さんは霊の子を、本ものを少なくとも二人つくれ。本ものを二人つくるためには、十人くらいの人たちを本当にこの道に入れなければダメですよ。十人のうち本当に残るのは多分二人くらいです。五分の一くらい残ればいいくらいなもんです。私は、しかし、一人残らず残ってもらいたい。

「残ってもらいたい」

と言ったって、ここにじゃないよ。神の民としてとどまってもらいたい。嫌なら、いいですよ、ちっとも私は無理はしません。私は一人だっていいんだから。本当だよ。

そこが福音の本当の強さなんです。

「石ころからアブラハムの子を起こす」

とまでいわれた。絶対に福音は勝つ。どんなものがはびこっても、福音は勝つ。真理はそれ自ら勝つんです。

「我は真理なり」

と言った、このキリストです。私たちは大安心をもって、この勝利の伝道ができる。決して眠った伝道ではない。

「最後の勝利は我らにあり」

ということは聖書が自ら証しているところです。

●受肉と霊体

テモテというまな息子、霊の息子、霊子にパウロは懇ろに書いている。

「我が真実の子たるテモテに贈る」（テモテ前1・2）

と一番先に書いてある。

「14 **われ速(すみや)かに汝に往かんことを望めど、今これらの事を書きおくるは、15 若(も)**

し遅からんとき人の如何に神の家に行うべきかを汝に知らしめん為なり。神の家は活ける神の教会なり、真理の柱、真理の基なり。16実に大いなるかな、敬虔の奥義『キリストは肉にて顕され、霊にて義とせられ、御使たちに見られ、もろもろの国人に宣伝えられ、世に信ぜられ、栄光のうちに上げられ給えり』

（テモテ前3・14～16）

私たちは神の家のものです。活ける神のエクレシアであります。皆さんは、真理の柱、真理の基にされている。不思議な言葉がある、

「霊にて義とされる」

と。これが、みな忘れられている。「肉にて顕れ」は、キリストという天界の霊的存在が受肉したということ。これは霊的存在で、本当にこれは霊生なんです。的じゃない。霊というものは決して空莫たるものではなくて、始めから霊は体をもっているんです。パウロがコリント前書15章で言っているとおり。我々の中に形成される、この「霊」と私が言いましたものは、霊体をもっている。観念的に何か、精神的なもの、霊的なもの、なんていうんじゃない。聖霊というものは具体的な存在なんです。その聖霊の生命は祈りだ。また、いろんな表現の仕方をするからね、

「御霊を消すな」

なんてパウロが云うけれども。聖霊という具体的な存在は、「炎」の如くに言われてみたり、「水」の如くに言われてみたり、表現はいろいろです。けれども、それがとにかく具体性をもったものである。「ソーマ」（体）を持っている。

キリストは受肉して、そして、我々と同じ弱さを担いながら歩かれた。

「罪ある肉の形にて」

とパウロがロマ書8章3節に言っているように、罪ある肉の形をとって受肉した。けれども、彼自身は罪ある肉そのものではない。

パウロの「肉」という言葉は、自己中心的な存在はどんなに精神的であっても、全部これを「肉」という。神・キリスト中心である存在を「霊」という。どんなにつまらない事をしていても、それが神さまのため人のために、己を棄てたあり方は霊的存在なんです。どんなにそれが立派そうに見えて、人に賞賛されるような事であっても、それが自己中心的なものであって、本当に神の真理を求め神の聖名を求めていないものは、これは「肉」である。

いわゆる普通の世界でもって、「霊的」とか、あるいは「肉的」とかいうのとは、もう一つ種類が違う。これはもう一つ大きな枠です。いわゆる「霊的」も「肉的」も全部、パウロにいわせれば、「肉」の中に入ってしまう。

私たちがそういった肉の身体を持っていましても、それが「肉」という意味じゃない。「肉」というのは、私たちが自己中心である時に「肉」である。我々の存在そのものが既に御霊、

霊体を宿して、神さま中心である時は、私たちは「霊」的にどしどし進められている存在なんです。もちろん我々の現実は矛盾構造です。霊になったり、肉になったり、ゴタゴタでありますけれども、しかし、いつも支配しているものは、パウロのいうところの霊でなければ、それは滅びである。

キリストは受肉して、そして本当にこの受肉体に於ていかに霊体的存在が素晴らしいものであり、それがいかに本当に我々の存在を全部救いあげる、霊肉渾然として私たちの魂も肉体も心も、一切これを救い上げるものであるかということを実証した。神さまの本願を受けているから、驚くべき愛がそこに現じて、そして、十字架をもってこれを消した。消して、復活をもって、更に驚くべき彼の地上の存在がどのようなものであったか、ということを実証したのがキリストの復活体で、それが天界に昇って、栄光を受けたというのは、

「栄光のうちに挙げられ給えり」

というのは、そのことです。「敬虔の奥義」というのは、実にパウロがここに言っている、この驚くべき言葉に集約されて語られている。

●謹みの霊

テモテに更に親しく手紙を書きまして、テモテ後書の方へいきますと、

「そは神の我らに賜いたるは、臆する霊にあらず、能力（ちから）と愛と謹慎（つつしみ）との霊なればなり。」（テモテ後1・7）

御霊は、何も恐くない。怯（おび）えない。

「神の能力とキリストの愛と御霊の謹み」

と言ってもいい。

「神の力とキリストの愛と霊の謹みをもった霊である」

ということ。キリストの十字架の愛を深く受けとっていないと、

「霊、霊」

なんて言っても、それは傲慢の霊になる。私たちはそういう心配は要らん。絶対にこの三つは離すことができない。私は霊的傲慢になるのを絶対に心配しない。それはもう、そうなったらダメになるのは、自分でもうはっきりしている。この「謹みの霊」ということ、これは自分がつぶれなければ。キリストの前に平伏さなければ、砕けなければ、私には力は来ない、真理もこない、愛も来ない。もうはっきりしているから、これがバロメータみたいなものです。

「自分がどうであろうか、こうであろうか」

というような自分の心配が段々ぬけていくようなのが、この「懼れなき霊」である。おびえざるところの霊である。

「私の信仰は…」

なんていって心配しているうちは、いつまでたっても、やっぱり私が問題になっている。私がそういう問題からぬけてしまう。

魂の上の真理というものは数学ではないから、ある一つの事を言うと、別な或る面が何か心配になってくる。私は全く矛盾したような事をまた言う。けれども、それは決して矛盾ではない。その有機体的構造が身についてきたら、これは本ものになってくる。

そういうわけで、皆さんは集会は続けて来なければダメですよ。集会というものは神さまの練りだからね、日本刀を鍛えるような。ある時は水の中に入れてしまう。ある時は火の中に入れる。段々練られて素晴らしい日本刀になっていく。決して、観念の論理的なつじつまなんて、そんなものじゃない。

グンデルト先生が私にくれた手紙の一節を読んでみます。

「本当に霊のみが私たちを活かすただ一つのものである。この御霊なくしては、どんな美しい言葉も、どんな学問的な神学も、空しい空っぽの藁に過ぎない。」

と、実におもしろい言葉です。その通りです。

●よき戦士としてあれ

「1わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵によりて強かれ。2且おおくの証人の前にて我より聴きし所のことを他の者に教え得る忠実なる人々に委ねよ。3汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難を忍べ。」（テモテ後2・1～3）

「よき兵卒として、よき戦士としてあれ」

と。決して専門家でなくて、凡人でいい。「ただびと」という字は、素人という言葉です。イエス・キリスト自身がただびとであった。専門の宗教家ではなかった。大工の子ですよ。キリストの造った細工があったら、大変なもんですね。

「よき兵卒として、戦士として忍べ」

と。「忍べ」というと何か苦しそうですね。けれども、ちっとも苦しくない。人間的には、感情的には苦しいものがあるけれども、パウロには、いつもキリストの喜びがある。喜びは何からくるか。キリストの愛から来る。人間が一番飢えているものは、何といっても、愛であります。しかし、人の愛には限度がある。けれども、キリストの愛は無限で、限りなき「極みまで」という。

「極みまで愛し給えり」

というのがヨハネ伝の13章に出ている。豊かに聖霊を与えて極みまで愛したもう。パウロはキリストの愛に圧倒されているわけだ。私たちは聖書の言葉を読んでいると、もう圧倒されてしまう。喜びの泉が湧いてくるから、苦難を一つも苦難としない。だから、ペテロも同じような具合に言っている。

「12**愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練（こころみ）を異なる事として怪しまず、13反ってキリストの苦難（くるしみ）に与（あず）かれば、与かるほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗（そし）られなば幸福（さいわい）なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。**」（**ペテロ前4・12～14**）

ピリピ書では、

「**喜べ喜べ**」

と書いてある。また、コロサイ書かどこかに

「**慰めの霊が…**」

と、たくさん「慰め」という字が出ている。「キリストの名のために」ということ。

「聖名をあがめさせたまえ」

なんて言ったって、遠くの聖名ではない。キリストの「主の祈り」を勿体ぶってやっているけれども、何も勿体ぶる必要はない。「聖名」というのは、私たちが運ばせられている、担わせられている聖名でありますから、「聖名を崇めさせ給え」というのは本当にはらわたから出てくるわけです。

「**神の御霊、キリストの御霊なんじらの上に留まり、宿り給うが故なり**」

と、この「留まる」は「宿る」と同じ字です。

「汝らの中に宿っているからである」

と。パウロ、ペテロ、ヨハネはみんなピタリです。言うところの言葉は違ったって、これはピタリ一つです。

テモテ書にあるこの「戦士」は必ず勝つ戦士です。

「生命をも御意のためにはもとより重んぜざるなり。しかし、御意のためには泰山の重きを自覚している」

という、その言葉はないけれども、私はその裏にそれを読む。

●軽騎兵の突貫

私の好きな、テニソンの「軽騎兵の突貫」という詩があります。第二節のところに、

「前進！　軽騎兵よ！　そこには少し怯えたような兵士があるか、一人もなかった。誰かが大きな間違いをしたことを知ってたというわけではないけれども。」

実は、命令に間違いがあった。これはクリミヤ戦争の時の話です。六百の軽騎兵が或る所を突貫するのは無謀な話で、全滅するのが決まっている。しかも、

「突貫せよ！」

という命令が出てしまった。どこかで間違えた。

「しかし、それは誰も知らなかったのであるが」

ということです。しかし、余りに無謀な命令だから、その隊長は、

「どうしてこういう命令が出たか？」

と思ったかも知れない。相手はロシア軍です。

「どうしてかと、これに答えることは彼らのことではなかった。また、何故かと問うことも彼らのことではなかった。ただ、彼らは、その命令に従って、それを行じて死ぬことのみが、殉命することが、彼らの一切であった。かくして、死の谷に向かって、この六百の軽騎兵は突貫して行った。」

この詩は、太鼓の音が響いてくるような韻律でもって書かれていて、素晴らしい詩です。

「いつ、彼らの栄光が消えることがあろうか。

この軍人精神を全うしたところの彼らの栄光が消える日はないと。

何と無謀な突貫を彼らはなしたのだろうか。全世界がそれをいぶかしく思った。彼らがなしたところの突貫に、軽騎兵の崇高な六百の魂に栄光あれ。」

私は英語の「ノーブル」（崇高）――ドイツ語では「エーデル」――という字が非常に好きだ。

「崇高である」

ということは、決して貴族的であることではない。崇高であることと、平民的であることとは決して矛盾しない。我々の魂はこの「崇高さ」をもたなくては。

私は朝、深山の如き、山の緑、竹林の緑を見ていると、

「ここに在るところの植物は何と浄化された、恵福なるかな」

と思う。東京ではゴミだらけだ。もちろん、ドロの中にも咲く蓮でなければならないけれども。私たちはいかなる環境においても、このノーブルさを失ってはダメです。同じようなことを、私たちは「四十七士」のあの魂に文句なしに感じます。

私が藤井先生から受けた印象は、このノーブルです。神が神であらんがためには、

「たとえ地獄に落ちても」

という、あの親鸞の『歎異鈔』の信仰を非常に先生は言っておられたけれども。これがやはり、無教会の信仰の或る一つのいい筋です。善きものは、どこまでも私は文句なしに善いともちろん申します。

そういうノーブルな、疑心のない、

「神一切、キリスト一切だ」

と言って、それを喜んで――服従ではない。藤井先生は

「服従」

という言葉をよく使ったが、あの服従という言葉はあまり感心しない――本当は

「信頼して喜んで従う」

こと。喜んで従うのでなければ、律法は満たされない。キリストは喜んで従った。パウロも、

「苦難を忍べ」

と言うけれども、この苦難は、我々はなにも望んで苦難を自分で買い取ることではない。

●殉教の天路

けれども、福音の道を歩く者は何らかの意味においてみな苦難をもちます。何らかの意味において十字架を担う。けれども、十字架の担いは決して――何か十字架というと、悲壮なようだけれども――これは必ず十字架を担わせる驚くべき力がくる、喜びが来る。生命が来ていなければ、担えるものではない。

「担わせられて、実は十字架に担われている」

というような始末。担われながら、担っていくというような始末です。しかも、それは自分のためではない。これは他人（ひと）のためです。本当の十字架は、キリストの十字架は人のためであって、何も自分のためではない。我々の本当の十字架はみなこれは人のために担っていく。いや、人のためにというか、人を十字架という担架に乗っけて担いでいくんだ。

今日は

「殉教の天路」

と題したのは、我々はいわゆる「殉教の死を死ぬか死なないか」は、それは知らん。けれども、私たちの道はこのキリストの教え――「教え」という言葉はあまり好きではない。「殉教」という言葉ができているから仕方がない。「マルテュス」という字は何も殉教と訳されるような言葉ではなく、「証し」という言葉から来ている――私たちは毎日が福音に殉じているわけです。

「福音に殉じている在り方」

が本当の

「天路」

なんです。それは天に通ずる。キリストが挙げられたのは、やはり十字架という関門を通って天上にいかれた。私たちも日々に十字架を負う。

「我よりも何々を愛するものは、

一番親しいようなものをキリストは片っ端からあげている。

それを愛する者は我にふさわしくない。いや実に、己自身を憎まずば、我が弟子となることができない。かつ、己が十字架を負いて我に従え」

と言われた。先程、讃美歌（331番）で歌っていただいたのも、

「主にのみ十字架を負わせまつり、われ知らずがおにあるべきかは」

というのはそのことであります。

パウロは、それがはっきりして、

「この道を通ってこそ自分には本当に義の冠が来る」

と言って、この義の冠を頂くことを喜んで、目安にして彼は突っ走って行ったわけです。

この世でどんなにそれが成功にみえ安楽に見えても、至り着く所が下り坂だったら、どうですか、これは。地上の生涯なんて高が知れている。それから先の生涯の方がはるかに永い。その先の遙かに永いところで、地獄行きだったらどうですかね。

「今の時の苦しみは来たるべき栄光に比ぶべきも非ず」

と、パウロがロマ書で言っているとおり。今の時の苦しみはしばらくにして、この栄光は、喜びは限りなきものである。しかも、担いながら、それは決して苦しいのではない。そこには必ず天的な喜びが伴っている。何となれば、人を救済し、人を福音にもたらせるというこの愛が働いているんだから。この天的な愛が働いているところには、必ずその人に喜びが満ちてくる。もう、不思議なものです。

喜びを求めるのではなく、喜びが必ずそこに湧いてくる、花咲いてくる。喜びの花が咲く。我々はみな喜びの花を胸に持っている。神さまは苦難を負わせる時に、必ず喜びの花をそこに咲かせている。いわゆる妙な禁欲的な、何かくすぶったような、そんなものでは絶対にない。福音の世界は実に豊かなものであります。だから、パウロが牢屋にいたって、

「喜べ、喜べ」

と言っている。パウロには喜びの花が咲いているから、そう言っている。ちゃんと喜びの花束をもっているんだ。

だから、そのような私たちが天使であることは、サタンの勢力に対しての戦いは、敵をぶっ倒すのではなくて、敵を救い上げる戦士であります。こういう戦いをする者はクリスチャンの他にないわけです。

「敵を愛する戦士なんて、そんなのがあるか」

という。敵を救い上げる戦士です。そういう戦士が本当の大和にくる。大きな和をもたらす者は、敵を救いあげる。敵を倒す者は大きな和にこない。これは小さく固まる。けれども、相手を救いあげていく者は一切のものにおいて大和で、どういう人を見ても、その人における何か善きものを見て、それを救い上げていこうという目になってくるわけです。

●善き戦闘

パウロはテモテ後書で、

「5**技を競う者、もし法に随いて競わずば冠冕を得ず。**

パウロはそこで霊の法とは言わなかったけれども、法則を破ったらダメです。法に従えば、本当の勝利がある。神の霊法は、人が見ようが見まいが、これは侵すべからざるところの霊法であります。この霊法は、ロマ書8章2節の

「生命の御霊の法」

です。「生命の御霊の法」にあってこそ、本当の平安がある。これが最も自由な世界です。

6**労する農夫まず実の分配を得べきなり。7汝わが言う所をおもえ、主なんじ**

に凡ての事に就きて悟を賜わん。8わが福音に云える如くダビデの裔にして死人の中より甦えり給えるイエス・キリストを憶えよ。

みんなは「死んでも死なないよ」と。

9我はこの福音のために苦難を受けて悪人のごとく繋がるるに至れり、然れど神の言は繋がれたるにあらず。」（テモテ後2・6～9）

牢屋に入れられたことが何度もある。けれども、

「神の言は繋がれたるにあらず。どんなに私たちを、相対的な存在を痛めつけ、自由を奪っても、神の言は絶対に人間によって繋がれはしない。逆に神の言は本当は縛ってしまう。神の言に罰せられているのが知らんか。両刃の剣であるぞ」

と。パウロの熾んなる言葉は、

「然れど神の言は繋がれたるにあらず」

という。パウロは今、最後の旅にのぼって感慨無量でありますが、テモテ後書4章の方にいきまして、大事な言葉がある。

「1われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給うキリスト・イエスの前にて、その顕現と御国とをおもいて厳かに汝に命ず。

いかに終末的な自覚であるかが分かる。終末的な現実にあってもう審判を目の前に見ている。しかし、いつ来るかは知らんですよ。何月何日なんて、そんなバカなことはパウロは言わない。

2なんじ御言を宣べ伝えよ、機を得るも機を得ざるも常に励め、寛容と教誨とを尽して責め、戒め、勧めよ。

パウロの教えは実に健全であります。

3人々健全なる教えに堪えず、耳痒くして私慾のまにまに己がために教師を増加え、4耳を真理より背けて昔話に移るとき来らん。5されど汝は何事にも慎み苦難を忍び、伝道者の業をなし、なんじの職を全うせよ。6我は今供物として血を灑がんとす、

私は殉教の死をもう既に御霊に示されているから、

わが去るべき時は近づけり。

既にやってきている、というような言葉です。

7われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果たし、信仰を守れり。8今よりのち義の冠冕わが為に備われり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜わん、ただに我のみならず、凡てその顕現を慕う者にも賜うべし。」（テモテ後4・1～8）

「われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果たし、信仰を守れり」

と、何とパウロは恵まれた人でしょうね。これは自分の実存を誇っているのではありません。全くイエス・キリストに捕らえられたから、こうなってしまったので、この告白は聖名を讃えている告白であります。同じことを言っても、自分の実存を誇るような、妙な影が射しているような言葉があるのはダメです。

●聖霊の維新

そして、パウロは本当にキリストの御霊の示しのごとく、エルサレムに行って囚われる。テトス書の中に極めて注目すべき言葉がある。テトス書の3章4節から7節は忘れないように。

「4されど我らの救主（すくいぬし）なる神の仁慈（なさけ）と人を愛したもう愛との顕れしとき、5我らの行いし義の業にはよらで、唯その憐憫（あわれみ）により、更生（うまれかわり）の洗いと

これは聖霊のバプテスマのことです。

「生まれ変わりの聖霊のバプテスマにより」

ということ。

我らの救主（すくいぬし）イエス・キリストをもて、豊かに注ぎたもう聖霊による維新（いしん）とにて

「聖霊によって全く新しくなったことによって」

ということです。

「聖霊の維新」

とは実に素晴らしい言葉だ。日本の歴史では、封建制がくずれて明治維新というのは確かに驚くべき維新だが、我々の生涯での維新は正に「聖霊の維新」であります。

清瀬の東京療養所にいる諸君は、清瀬にいるうちにこの「聖霊の維新」を受けて出てこなければ、つまらんよな。「私は聖霊の維新を受けるまでは清瀬を出ない」と（笑）。

我らを救い給えり。7これ我らが其の恩恵（めぐみ）によりて義とせられ、永遠（とこしえ）の生命（いのち）の望みにしたがいて世嗣（よつぎ）とならん為なり。」（テトス3・4～7）

まぁ、畳みかけて、何と素晴らしい言葉が次から次へと湧いてきて、圧倒されてしまう。「信仰によりて義とされる」と、さんざん学んできたが、ここには、

「恩恵により義とされる」

と書いてある。

「我々の救われたのは恵（めぐみ）と信仰による」

と、恵みが先に書いてある。御霊の信仰はこの

「恵みによりて義とされる」

という言葉をしっかりつかんでこそ、本ものです。その点では、アウグスティヌスというのは大きな魂だった。さすがに、キリスト教界の一番大きな神学家とまで言われるくらい

な幅を持っています。これは恵みに生きたからです。ルターはむしろ信仰を強調したけれども、アウグスティヌスは恩寵恩恵を強調した。

「キリストの恵み、十字架・復活・聖霊の恵によって義とされた」

と。我々は、それで本当に義人、羊の我たる義とせられた。「義」という字の成り立ちは「羊の我」と書く。羊と我という字が一つになっている。即ち、神の意志を体現し行ずるところの羊の我とされた。これは聖霊がこなければ羊の我、義にはならない。

●絶対の死か、絶対の生か

使徒行伝に戻ります。パウロが、殉教の天路をめがけて、エルサレムで捕まるようなことを言ったら、

「それは大変だ」

と、また周りの者達が戒めようとしたが、パウロはそれを

「いや、そうではない」

と言ったことがそのすぐ後に出ている。21章、

10我ら数日留り居るうちに、アガボと云う預言者、ユダヤより下り、11我らの許に来りてパウロの帯をとり、己が足と手とを縛りて言う『聖霊かく言い給う「エルサレムにて、ユダヤ人、この帯の主を斯の如く縛りて異邦人の手に付さん」と』12われら之を聞きて此の地の人々とともにパウロに、エルサレムに上らざらんことを勧む。13その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることも覚悟せり』14斯く我らの勧告を納れぬによりて『主の御意の如くなれかし』と言いて止む。

私たちは、ただ殉教というような言葉にこだわるわけではない。既に、福音に生きている者は、いわゆる相対的な死生を突破している。私たちは人間だから、それは問題ですよ。しかし、それは、相対的な生と相対的な死を考えているから、いつも私たちの中にひとつのそういった人間的な問題がある。死生の問題は相対的な問題で、もうひとつ奥の、もうひとつ深い死生がある。これが、黙示録で言われているところの

「第二の死」

というのがある。この「第二の死」の地獄の中に入ったらおしまいです。相対的な死生ではなくて、絶対的な生か、絶対の死に至る路か、路は二つしかない。やがて、神さまの審判をとおして至りつくところは、

「絶対の死か、絶対の生か」

ということ。しかし、

「神さまは、万人を救済せんとのご本願をもっておられる」

とペテロが言っている。

「一人でも多く救われて、滅びざらんがために、耐え忍びて審判の時を延ばしていらっしゃる」

と書いてある。

「絶対の生」とは何か。言うまでもなく、

「キリストの十字架を本当に受け、聖霊漬けされているところの生」

は絶対の生です。霊体をもっているのですから。肉体は滅びたって、それは本当の死ではない。

だから、肉体の滅びとしての相対的な死というものをも或る人たちは乗り越えるかもしれないよ。聖書の中には、そういうこともちょっと書いてある。とにかく、私たちは、罪の価として、こういった死がやってくる。けれども、この死はもはや既に打ち勝たれている死なんです。既にうち勝たれている死でありますから、福音において生きていれば、その死は何らかの意味に於て、いわゆる殉教の死ではないけれども、福音に殉じている死である。

クリスチャンの死は、福音に殉じた殉教の死で質的にはあるべきであります。質的には殉教の死だから――「絶対的な死」は、これはいかん――我々は絶対の生にあるから、いわゆる相対的な生死というものを乗り越えているわけです。でありますから、苦難に臨んでも、それを喜んで耐えることができるのは、耐えることのできる力を持っているからです。喜びを、生命を持っているからです。これは何ものにも替えることができない。人生は、これをつかむまでは、その人の魂は真の喜びを得ないようにできているのだから、しょうがない。

「私はそうでない」

なんて、本当は誰も言えないんだ。

「どんなことがあっても大丈夫な喜びが、生命というものが来ていますか」

ということ。いわゆる信仰では答えられない。

これはキリストの贖いによって来たところの「霊子」が宿っているからです。原子でも、素粒子でも、電子でも、中間子でも、何でもない。それは私たちの霊子というもの。これは他のものとは交換できない。これが核分裂を行って、人を救っていくわけだ。